

貞享の大法に伴う武家屋敷地の変動* 福井城下の武家地の研究 その31

伊豆蔵 庫喜^{*1}, 吉田 純一^{*2}

The Change of the Samurai's Premises with the Salary Reduction of Jyokyo Three Years A Study on the Samurai's Premises of the Fukui Castle Town, Part 31

Kouki IZUKURA^{*1} and Junichi YOSHIDA^{*2}

^{*1} FUT Fukui Castle and Castle Town Research Laboratory

This paper considers of the change of Samurai's Premises with the salary reduction of Jyokyo three years. A person of dismissal with the salary reduction was 288 people, and the immigrant was 51 people. It was dismissed 191 people intermediate samurai's less than 300Koku and the low-class samurai's. The person of large number of dismissal lived in the perimeter of the Fukui Castle Town. In contrast, there are only four people of dismissal in the center of the Fukui Castle Town. As for the immigrant, of the aide of *Tunamasa MATUDAIRA* were picked. *Kozaemon TAKADA* and *Sakouemon NARA* who lived in *Keya-Cho* moved in the unoccupied house of the center of the Fukui Castle Town. The center of the Fukui Castle Town comes back to the samurai's premises by Syotoku four years.

Key Words : 貞享の大法, 罷免者, 移住者, 再登用者, 空屋敷地, 明地

1. はじめに

本研究はこれまでに『松平文庫』所蔵の8図の城下絵図⁽¹⁾を用いて、江戸初期から幕末までの8期における福井城下の武家地の屋敷割の様相や居住者の変遷を解明してきた⁽²⁾。その結果、福井城下の武家地における敷地数の変動は、藩の動向によって大きく左右され、特に貞享3年(1686)の大法⁽³⁾の直後に城下東南部の城ノ橋地区や橋南の毛矢町などで大きな変化が認められた。

本稿は大法によって暇を出された家臣(以後、罷免者)および6代綱昌に随従して江戸(鳥越屋敷)に移った家臣(以後、移住者)に着目し、それらの屋敷地が大法前後でどのように変化したのかを検討する。但し、本稿では下級武士にあたる与力や足軽などは対象外とする。

2. 貞享の大法に伴う罷免者, 移住者について

2.1. 罷免者, 移住者の数

大法に伴う罷免者の数は『半知二付減員覚帳』⁽⁴⁾(以後、『半知減員覚帳』)の「貞享三寅年新規御領知被仰出御家中被減二付、六月十日御暇被下面々(此内在江戸之者同十一日於江戸被仰渡)」によると、288名である。一方、移住者数も同じ『半知減員覚帳』の「越前様へ相勤度旨願申上鳥越御屋敷へ被遣面々」で確認でき、こちらは51名である。彼らの大法前の屋敷地を、貞享2年(1685)の『御福居城下絵図』⁽⁵⁾(以後、『貞享絵図』)と比較しながら、屋敷地が特定できた210名(罷免者198名, 移住者12名)を町別に示したものが表1である。表2は『貞享絵図』に名前がなく、屋敷地を特定できない129名(罷免者90名, 移住者39名)を示している。

* 原稿受付 2016 年 2 月 23 日

^{*1} FUT 福井城郭研究所

^{*2} 建築土木工学科

E-mail: kouki-i@fukui-ut.ac.jp

表1 屋敷地を特定できた罷免者、移住者および再登用者

『半知二付家中減員覚帳』		町名	屋敷地番号	『福居御城下絵図』	『半知二付家中減員覚帳』		町名	屋敷地番号	『福居御城下絵図』
貞享3年 (1686)	禄高 (石)				貞享3年 (1686)	禄高 (石)			貞享2年 (1685)
1 井河長八	500	東三ノ丸	ES-2	井河長八	109 鈴木加兵衛	25石5人扶持	新屋敷①	S1-B1	鈴木加兵衛
2 本宮祐義	100石10人扶持	大名町	Da-20	本宮祐義	110 森宗右衛門	700		S1-B2	森宗右衛門
3 杉田又八	500	下馬門前	M-3	杉田又八	111 河瀬次郎三郎	100		S1-B5	河瀬次郎三郎
4 生駒基太夫	200	湊門内	M-16	生駒基太夫	112 遠藤五左衛門	500		S1-C2	遠藤五左衛門
5 有賀富宮	1000	新築地	ST-6	有賀富宮	113 山内小太郎	1900	新屋敷②	S1-C6	山内小太郎
6 栗崎道喜	300	中ノ馬場	Na-2	栗崎道喜	114 本庄長三郎	30石7人扶持		S1-C6	本庄長三郎
7 浅田左内	400		Na-4	浅田左内	115 小笠原利兵衛	150		S1-C7	小笠原利兵衛
8 海福市藏	250		Na-5	海福市藏	116 森勘兵衛	400		S1-D6	森勘兵衛
9 石川七之助	300	土居ノ内	Na-7	石川七之助	117 中山六之介	100	新屋敷③	S1-D12	中山六之介
10 牧野九郎左衛門	350		Na-8	牧野九郎左衛門	118 下山八郎兵衛	200		S2-B4	下山八郎兵衛
11 水見権左衛門	300		Na-17	水見権左衛門	119 真杉儀右衛門	100		S2-B5	真杉所左衛門
12 飯田藤次郎	300		Na-39	飯田藤次郎	120 松原清右衛門	150	新屋敷④	S2-G2	松原清右衛門
13 本多助七	200	神明前	Do-14	本多助七	121 坂野弥三左衛門	300		S2-G9	坂野弥三左衛門
14 熊谷小兵衛	500		Do-20	熊谷小兵衛	122 久世市左衛門	100		S2-G11	久世市左衛門
15 垣植伊右衛門	500		Do-22	垣植伊右衛門	123 秋本八左衛門	200		S2-G13	秋元八左衛門
16 佐久間忠兵衛	300	御泉水町	Do-25	佐久間忠兵衛	124 林森右衛門	150	新屋敷⑤	S2-G15	林森右衛門
17 岡部与三兵衛	200		Si-1	岡部与三兵衛	125 関権吉	25石5人扶持		S2-D2	関権吉
18 山上孫左衛門	100		Si-11	山上孫左衛門	126 生田十左衛門	150		S3-C2	生田十左衛門
19 岡部五郎兵衛	500		OS-1	岡部五郎兵衛	127 土淵平助	200	新屋敷⑥	S3-C3	土淵平助
20 安嶋定之丞	300	元御泉水町	OS-10	安嶋定之丞	128 高田安左衛門	200		S3-C5	高田安左衛門
21 磯松儀兵衛	200		MO-3	磯松儀兵衛	129 津田小左衛門	300		S3-C9	津田小左衛門
22 伊井濱之介	10人扶持		MO-4	伊井濱之介	130 妹尾新七	25石6人扶持		S3-D2	妹尾新七
23 兼松七郎右衛門 (跡)	300	天王町	MO-6	兼松七兵衛	131 吉池七之丞	5人扶持	新屋敷⑦	S3-D7	吉池七之丞
24 羽中田市左衛門	20人扶持		MO-5	羽中田新七	132 吉池宗兵衛	22石3人扶持		S4-C14	吉池宗兵衛
25 平井一学	300		MO-6	平井逸学	133 三原金右衛門	150		S4-C25	三原金右衛門
26 堀久助	300		MO-7	堀久助	134 山内七十郎	30石7人扶持		S4-C30	山内七十郎
27 伊藤与左衛門	250	八軒町	Te-1	伊藤与左衛門	135 多賀谷宇左衛門	200	新屋敷⑧	S5-C8	多賀谷宇左衛門
28 渡辺十三郎	150		Te-3	渡辺十三郎	136 本多源五左衛門	300		S5-C11	本多源五左衛門
29 福田八之丞	150		Te-4	福田八之丞	137 富永才右衛門	300		S5-C18	富永才右衛門
30 春日源之丞	300		Te-6	春日源之丞	138 山上甚十郎	5人扶持	新屋敷⑨	S6-E7	山上甚十郎
31 丹羽安左衛門	100	上江戸町	KE-3	丹羽安左衛門	139 戸田長右衛門	20石4人扶持		S6-F11	戸田長右衛門
32 日下部善太夫	300		KE-8	日下部善太夫	140 仙石喜兵衛	53石6人10人扶持		S6-F3	仙石喜兵衛
33 秋田六郎右衛門	500		KE-13	秋田六郎右衛門	141 山野次郎太夫	150		S6-F5	山野次郎太夫
34 丹羽久之丞	500		KE-24	丹羽久之丞	142 松井甚右衛門	100	毛矢町	S6-F12	松井甚右衛門
35 戸田七兵衛	300	中江戸町	NE-1	戸田七兵衛	143 山原傳左衛門	150		S6-G9	山原傳左衛門
36 平岡左衛門	250		NE-5	平岡左衛門	144 設楽一郎兵衛	300		S6-F13	設楽一郎兵衛
37 長谷川三右衛門	300		NE-9	長谷川三右衛門	145 久世与左衛門	200	武家地の外側	KY-6	久世与左衛門
38 嶋田彦五郎	700		NE-11	嶋田彦五郎	146 奈良平三郎	200		KY-8	奈良平三郎
39 井上義甫	200	下江戸町	NE-16	井上義甫	147 西尾甚兵衛	300		KY-9	西尾甚兵衛
40 岡部小次郎	300		NE-18	岡部小次郎	148 力九十兵衛	400		KY-10	力九十兵衛
41 河合伊右衛門	100		SE-1	河合伊右衛門	149 香西八郎兵衛	300	橋北	KY-13	香西八郎兵衛
42 山下八右衛門	200		SE-3	山下八右衛門	150 宇野長兵衛	300		KY-16	宇野長兵衛
43 田中四兵衛	200	御使番町	SE-7	田中四兵衛	151 岡九郎左衛門	150		KY-18	岡九郎左衛門
44 瀧田弥左衛門	100		SE-10	瀧田弥左衛門	152 水野権太夫	600		KY-27	水野権太夫
45 伊藤権兵衛	300	鷹匠町	SE-21	伊藤権兵衛	153 奥田佐五兵衛	200	橋南	KY-29	奥田佐五兵衛
46 鈴木甚五太夫	200		SE-26	鈴木甚五太夫	154 大熊勘左衛門	250		KY-29	大熊勘左衛門
47 笹治三左衛門	200		SE-27	笹治三左衛門	155 立岩権兵衛	150		KY-33	立岩権兵衛
48 林六左衛門	300		SE-28	林六左衛門	156 津川弥左衛門	300	勝見外町	KY-40	津川弥左衛門
49 水間仙右衛門	25石4人扶持	天草町	SE-30	水間仙右衛門	157 久世弥五兵衛 (跡)	150		KY-48	久世弥五兵衛
50 河合与三兵衛	300		SE-31	河合与三兵衛	158 佐野与一右衛門	400		KY-48	佐野与一右衛門
51 岩村門右衛門	300		SE-32	岩村門右衛門	159 石渡一郎右衛門	150	橋北	KY-48	石渡一郎右衛門
52 笹治源左衛門	25石10人扶持		SE-33	笹治源左衛門	160 嶋崎一郎右衛門	300			嶋崎一郎右衛門
53 井口兵右衛門	300	永平寺町	SE-34	井口兵右衛門	161 津田善兵衛	200	橋南		津田善兵衛
54 剣持七郎右衛門	100		SE-35	剣持七郎右衛門	162 嶋田安之丞	200			嶋田安之丞
55 大井田角右衛門	300		SE-36	大井田角右衛門	163 塩間丈宅	200			塩間丈宅
56 澁江清兵衛	150		SE-37	澁江清兵衛	164 松嶋金兵衛	150	勝見外町		松嶋金兵衛
57 中村金兵衛	100	龍匠町	SE-38	中村金兵衛	165 伴平太夫	100			伴平太夫
58 脇田新兵衛 (跡)	100		SE-39	脇田新兵衛	166 津川喜平治	銀20枚5人扶持			津川喜平治
59 真柄忠右衛門	100		SE-40	真柄忠右衛門	167 吉川宇左衛門	20石4人扶持			吉川宇左衛門
60 梅沢十左衛門 (跡)	100	天草町	SE-41	梅沢十左衛門	168 磯貝又八	35石5人扶持	橋北		磯貝又八
61 井上平太夫	100		SE-42	井上平太夫	169 通木八右衛門	金2枚5人扶持			通木八右衛門
62 武藤六郎兵衛	100		SE-43	武藤六郎兵衛	170 大工原九右衛門	150			大工原九右衛門
63 毛受太郎兵衛	200		SE-44	毛受太郎兵衛	171 波々伯部市右衛門	150	橋南		波々伯部市右衛門
64 奈良治左衛門	70	永平寺町	SE-45	奈良治左衛門	172 添田三右衛門	150			添田三右衛門
65 吉田十郎兵衛	150		SE-46	吉田十郎兵衛	173 神谷庄左衛門	30石7人扶持			神谷庄左衛門
66 石黒源五左衛門	150		SE-47	石黒源五左衛門	174 近藤作之丞	20石5人扶持			近藤作之丞
67 太谷次郎作	300		SE-48	太谷次郎作	175 立岩名右衛門	20石4人扶持	勝見外町		立岩名右衛門
68 飯嶋勘兵衛	30石7人扶持	龍匠町	SE-49	飯嶋勘兵衛	176 水野太兵衛	300			水野太兵衛
69 坂井弥一右衛門	100		SE-50	坂井弥一右衛門	177 高塚彦太郎	200			高塚彦太郎
70 中根伊兵衛	200		SE-51	中根伊兵衛	178 宮沢八右衛門	150			宮沢八右衛門
71 加藤五郎太夫	150	永平寺町	SE-52	加藤五郎太夫	179 加藤四郎左衛門	150	勝見外町		加藤四郎左衛門
72 下川庄右衛門	150		SE-53	下川庄右衛門	180 白熊徳太郎	150			白熊徳太郎
73 末高李左衛門	200		SE-54	末高李左衛門	181 木村左五太夫	150			木村左五太夫
74 雪吹六之丞	30石7人扶持		SE-55	雪吹六之丞	182 寒江角右衛門	150	勝見外町		寒江角右衛門
75 堀兼左次右衛門	300	龍匠町	SE-56	堀兼左次右衛門	183 丹羽善右衛門	150			丹羽善右衛門
76 成田吉左衛門	300		SE-57	成田吉左衛門	184 山本吉太夫	100			山本吉太夫
77 浅香七郎右衛門	100		SE-58	浅香七郎右衛門	185 服部門兵衛	100	勝見外町		服部門兵衛
78 高村理左衛門	150		SE-59	高村理左衛門	186 野本藤兵衛	100			野本藤兵衛
79 太田武左衛門	100	龍匠町	SE-60	太田武左衛門	187 桑原左太夫	25石5人扶持			桑原左太夫
80 河崎次郎左衛門	150		SE-61	河崎次郎左衛門	188 高見安兵衛	25石5人扶持			高見安兵衛
81 丹下左助	150		SE-62	丹下左助	189 松田長右衛門	24石4人扶持	勝見外町		松田長右衛門
82 遠山磯右衛門	250		SE-63	遠山磯右衛門	190 井上久右衛門	20石5人扶持			井上久右衛門
83 市橋孫平治	200	龍匠町	SE-64	市橋孫平治	191 並塚善兵衛	20石4人扶持			並塚善兵衛
84 伊藤勘兵衛	500		SE-65	伊藤勘兵衛	192 内藤弥五左衛門	35石5人扶持			内藤弥五左衛門
85 山田十郎右衛門	400	龍匠町	SE-66	山田十郎右衛門	193 丹波市右衛門	20石5人扶持	勝見外町		丹波市右衛門
86 長沼五兵衛	100		SE-67	長沼五兵衛	194 松田弥右衛門	20石3人扶持			松田弥右衛門
87 那須弥十郎	300		SE-68	那須弥十郎	195 稲葉五郎七	20石4人扶持			稲葉五郎七
88 磯貝市之助	10人扶持		SE-69	磯貝市之助	196 秋山三五太夫	20石4人扶持	勝見外町		秋山三五太夫
89 天野宗八	100	城ノ橋②	SE-70	天野宗八	197 荒川助十郎	10人扶持			荒川助十郎
90 津田八右衛門	300		SE-71	津田八右衛門	198 海美善之丞	10人扶持			海美善之丞
91 嶋田弥太夫	150		SE-72	嶋田弥太夫					
92 戸祭儀右衛門	350		SE-73	戸祭儀右衛門					
93 園枝平兵衛 (跡)	600	城ノ橋③	SE-74	園枝平兵衛			勝見外町		
94 虎走七左衛門	200		SE-75	虎走七左衛門					
95 荒沼権兵衛	450		SE-76	荒沼権兵衛					
96 伊丹新之丞	200		SE-77	伊丹新之丞					
97 横地新五兵衛	150	城ノ橋④	SE-78	横地新五兵衛			勝見外町		
98 田中助右衛門	30石7人扶持		SE-79	田中助右衛門					
99 水野彦左衛門	200		SE-80	水野彦左衛門					
100 土方源右衛門	20石4石9人3石8人3石8人		SE-81	土方源右衛門					
101 畑牛之丞	250	城ノ橋⑤	SE-82	畑牛之丞			勝見外町		
102 飯川彦兵衛	500		SE-83	飯川彦兵衛					
103 才川市左衛門	35石5人扶持		SE-84	才川市左衛門					
104 和田金助	200		SE-85	和田金助					
105 原助次右衛門	20石4石9人3石8人3石8人	城ノ橋⑥	SE-86	原助次右衛門			勝見外町		
106 渡辺弥兵衛	10石4石9人3石8人3石8人		SE-87	渡辺弥兵衛					
107 玉本源太夫	200		SE-88	玉本源太夫					
108 石川太右衛門	300		SE-89	石川太右衛門					

計 198名

*1: 含. 37名は武家地の外側に屋敷地を持つ

1 毛受左門	1300	大名町	Da-20	毛受左門
2 堤甚三郎	900	中ノ馬場	Na-21	堤甚三郎
3 須十太夫	1300	土居ノ内	Do-8	須十太夫
4 柳小平次	400	神明前	Si-4	柳小平次
5 林八太夫	200	天王町	Te-2	林八太夫
6 田嶋権七	200	天王町	Te-8	田嶋権七
7 高塚甚兵衛	300	上江戸町	KE-20	高塚甚兵衛
8 吉岡六兵衛	150	天草町	Am-21	吉岡六兵衛
9 石川宗左衛門	1200	永平寺町	Ei-1	石川宗左衛門

表2 屋敷地を特定できない罷免者と移住者および再登用者

『半知二付家中減員覚帳』		町名	屋敷地番号	『福居御城下絵図』
貞享3年 (1686)	禄高 (石)			貞享2年 (1685)
1 千本長右衛門	400			千本長太夫
2 吉田権之丞	400			
3 海福権兵衛	300			海福勘介
4 佐々木平八	300			
5 竹村甚兵衛	200			
6 水野定右衛門	200			水野彦右衛門
7 斎藤武助	200			
8 中野兵右衛門	200			中野惣兵衛
9 久嶋五郎太夫	200			久島武太夫
10 有賀寿閑	200			
11 川瀬勘次郎	150			川瀬市之丞
12 多賀谷弥右衛門	150			多賀谷宗左衛門
13 稲垣金蔵	150			
14 渋谷甚太夫	150			
15 坂井三五郎	150			
16 関弥平治	150			関権吉
17 東美安左衛門	150			
18 高木長蔵	150			
19 安嶋庄左衛門	150			安嶋定之丞
20 山田甚太夫	150			
21 鈴木武兵衛	150			鈴木源兵衛
22 狩野竹雲(跡)	150			
23 山路三右衛門	150			
24 伊藤茂左衛門	150			伊藤与左衛門
25 嶋田吉左衛門	150			嶋田清左衛門
26 木村九右衛門	150			
27 小川庄之助	100			
28 藤田一郎兵衛	100			藤田清兵衛
29 富岡平兵衛	100			富岡喜兵衛
30 本庄弥太夫	100			
31 神谷清兵衛	100			
32 菅谷庄右衛門	100			菅谷市右衛門
33 高野甚右衛門	100			
34 植山弥次兵衛	100			
35 草間弥吉	100			
36 有賀信順	100			
37 真下宗朔	80			
38 藤田徳右衛門	50			
39 本阿弥光怡	362石8斗5升			
40 小川寿健	200石21人扶持			
41 瓜生玄盛	150石10人扶持			
42 服部道清	40石5人扶持			
43 西山寿庵	35石5人扶持			
44 野々山三之助	〃			
45 中山一郎兵衛	〃			中山藤兵衛
46 渡辺弥右衛門	30石7人扶持			
47 服部三左衛門	〃			
48 堀助太郎	〃			
49 周防助五郎	〃			周防猪左衛門
50 水嶋十三郎	〃			
51 佐野牛右衛門	〃			
52 川名三之助	〃			
53 松原安之丞	〃			松原五兵衛
54 水谷梶之助	〃			
55 水野五左衛門	25石10人扶持			
56 平井十郎兵衛	25石6人扶持			
57 西尾勘助	〃			
58 若月与五右衛門	〃			
59 原田浅右衛門	25石3人扶持			
60 田辺意安	20石5人扶持			
61 高橋伝右衛門	〃			高橋金左衛門
62 横山七郎兵衛	20石4人扶持			横山藤八
63 寺田平助	〃			
64 加藤与八郎	〃			
65 高畑加平太	〃			
66 飯嶋源六	20石3人扶持			
67 柳下孫三郎	15石3人扶持			柳下喜左衛門
68 国沢仲右衛門	15石5人扶持			
69 飯川武左衛門	銀20枚5人扶持			
70 萩野豊左衛門	〃			

『半知二付家中減員覚帳』		町名	屋敷地番号	『福居御城下絵図』
貞享3年 (1686)	禄高 (石)			貞享2年 (1685)
71 丹波金左衛門	銀20枚5人扶持			丹波八左衛門
72 水野所左衛門	〃			
73 小嶋頼八	〃			
74 今立門右衛門	〃			今立六右衛門
75 小原安左衛門	〃			
76 渡辺弥左衛門	銀20枚4人扶持			渡辺権左衛門
77 原藤次右衛門	銀20枚4人扶持			原助次右衛門
78 根本源太夫	銀10枚15人扶持			
79 栗屋義祝	20人扶持			
80 浅井十次郎	15人扶持			
81 萩野八十郎	〃			
82 三崎玉雲	5人扶持			
83 横井意丹	〃			
84 井上権平	〃			
85 青木与一郎	〃			
86 小原儀太夫	〃			
87 伊野浅右衛門	〃			伊野次太夫
88 菌部伝之丞	〃			
89 杉浦又四郎	〃			
90 中山長三郎	3人扶持			
雲晴院	500			
了寿院	銀10枚10人扶持			
東光寺	10			
弘祥寺	20			
清源寺	20			

計 90名
*3: ・・寺方 5ヶ寺

1 畑寛右衛門	200			
2 恒岡権太郎	200			恒岡安左衛門
3 樋口小左衛門	200			
4 酒井七郎兵衛	200			
5 黒子道由	200			
6 橋本次郎兵衛	150			
7 上田藤助	150			
8 奈良伊右衛門	150			
9 二宮彦右衛門	100			
10 岩本勘七	35石5人扶持			
11 松山九兵衛	30石7人扶持			
12 高田伝六	30石7人扶持			
13 小栗源蔵	〃			
14 長谷川三六	〃			
15 遠山貞右衛門	〃			遠山磯右衛門
16 仙石小三郎	〃			
17 荒川善太郎	〃			
18 牧野藤太夫	〃			
19 永見又五郎	〃			
20 桑山権之助	〃			
21 上田三郎右衛門	30石4人扶持			
22 井上角右衛門	28石5人扶持			
23 加藤又助	25石5人扶持			
24 井上新平	〃			
25 橋本太兵衛	25石5人扶持			
26 井上徳左衛門	20石4人扶持			
27 中田宗兵衛	〃			
28 佐藤金兵衛	20石3人扶持			
29 大倉六右衛門	18石3人扶持			
30 沢崎与五左衛門	17石3人扶持			
31 小田忠左衛門	〃			
32 伴久右衛門	〃			
33 大谷三太夫	〃			
34 叶間長左衛門	〃			
35 福田又助	15石3人扶持			
36 渡辺喜太夫	14石3人扶持			
37 黒子由銓	10人扶持			
38 畑金蔵	7人扶持			
39 足立生之丞	5人扶持			

計 39名
*4: ・・表1同様 綱昌に随従して江戸に移った家臣を示す

2.2. 罷免者、移住者の禄高

罷免者 289 名のうち、半数を超える 191 名が 100 石以上の知行取が占めている。内訳をみると、100 石代が 84 名、200 石代が 42 名、300 石代が 41 名、400 石代が 8 名、500 石～1000 石が 14 名で、1000 石以上は 1900 石の山内小太郎と 1000 石の有賀斎宮 2 名だけである。したがって、罷免者は主に 300 石以下の中級や下級武士に多い。

一方、移住者 51 名は、1300 石の毛受左門や狛十太夫ら 3 名の上級武士が含まれている。その中には、部屋住より綱昌に召仕した樋口小左衛門のほか、小姓頭の一柳小平治をはじめ堤甚三郎や林八太夫、田島藤七ら 14 名の小姓の同行も認められる。このように、移住者は綱昌の側近を中心に選ばれたとみてよい。

2.3. 罷免者、移住者の屋敷地

図 1 は、大法前の『貞享絵図』に罷免者の屋敷地（青色）と移住者の屋敷地（黄緑色）を示したものである。

2.3.1 罷免者

図 1 によると、罷免者の屋敷地が特定できるのは 198 筆で、足羽川を隔てた橋南の毛矢町と橋北の本丸の北側から東側にかけて分布している。

最も多い区域は城下の東南隅にある城ノ橋地区（含、新屋敷）⁽⁶⁾で 59 筆ある。このうち新屋敷①区が 9 筆、②区が 8 筆、③区が 6 筆、④区と⑤区が同じ 3 筆で、⑥区が 8 筆の計 37 筆である。一方、城ノ橋は②区が 6 筆、③区と⑤区が 3 筆で同じであり、④区が 4 筆、⑥区が 6 筆でこちらは計 22 筆である。既報⁽⁷⁾のように、新屋敷は慶長以来、中級と下級武士の屋敷地が多い区域である。

新屋敷に次いで、新屋敷の東方、新川を隔てた一画（以後、勝見外町）に 23 筆みられる。勝見外町は、寛文 9 年（1669）の大火⁽⁸⁾後から貞享 2 年にかけて、新たに設けられた武家町で、城下特有の鍵曲した通りや矩形の屋敷地はみられず、敷地もほぼ均等に整備されている。勝見外町も新屋敷同様、中級・下級武士の居住区に相当し、敷地数 59 筆中 23 筆が罷免者の屋敷地である。

これら 2 町に次いで毛矢町も 39 筆中 14 筆が罷免者の屋敷地である。この中には上級武士の水野権太夫（600 石）や力丸十兵衛、佐野与一右衛門（400 石）も含まれており、個々の敷地は新屋敷や勝見外町よりも大きめである。

このほか少数であるが、本丸の北方の 2 重目と 3 重目の堀の間にある土居ノ内に 4 筆、神明前に 2 筆、御泉水町に 3 筆、元御泉水町 6 筆、天王町 5 筆、八軒町に 3 筆、さらにその 1 重北側の御使番町に 3 筆、下江戸町に 4 筆、中江戸町に 6 筆、上江戸町に 8 筆みられる。これら 10 町の筆数を合わせると 56 筆になり、図 1 に示したように 56 筆が 3 重目の堀に沿って帯状に分布している。

これ以外に罷免者の屋敷地が確認できるは、百間堀の東側の元割場に 2 筆、中ノ馬場に 7 筆みられ、城下の東端にある天草町に 7 筆、永平寺町に 8 筆、観音町に 8 筆、餌指町に 1 筆の計 33 筆ある。したがって、これまでみてきた新屋敷から餌指町までの城下周辺部の罷免者の屋敷地を合計すると 185 筆になり、全体（198 筆）の 93% を占めている。特に新屋敷、城ノ橋、勝見外町と毛矢町の 4 町で 96 筆（48%）あり、ほぼ半数がこれら 4 町に集中していることが指摘できる。

これに対して、城下中心部は郭内の北二ノ丸と東三ノ丸に 1 筆ずつと、大名町や下馬門前、漆門内、東三ノ丸などの上級武家屋敷町に 5 筆の計 7 筆のみである。したがって、城下中心部は罷免者の屋敷地が全体の 3.5% しかなく、罷免者の屋敷地が極めて少ないことがわかる。

2.3.2 移住者

移住者の屋敷地を特定できるのは、黄緑色で示した 12 筆である。移住者の屋敷地は、城下全域に点在しており、罷免者の屋敷地が少なかった城下中心部の大名町に毛受左門、土居ノ内に狛十太夫、中ノ馬場に堤甚三郎ら上級武家の屋敷地が確認できる。

一方、罷免者の屋敷地が多かった勝見外町や毛矢町には、移住者の屋敷地は 1 筆もみられない。したがって、移住者の屋敷地は、居住区に関係なく城下全域に点在している（図 1 参照）。

以上、大法に伴う罷免者と綱昌に随行して江戸に移住した家臣の屋敷地を検討した結果、大法直後に罷免者と移住者の屋敷地を合わせると210筆の武家屋敷地が空屋敷地（以後、罷免者と移住者の屋敷地跡は空屋敷地とする）に替ったこと、なかでも城下周辺部の新屋敷や勝見外町、城ノ橋、毛矢町の4町に集中していたことが指摘できる。

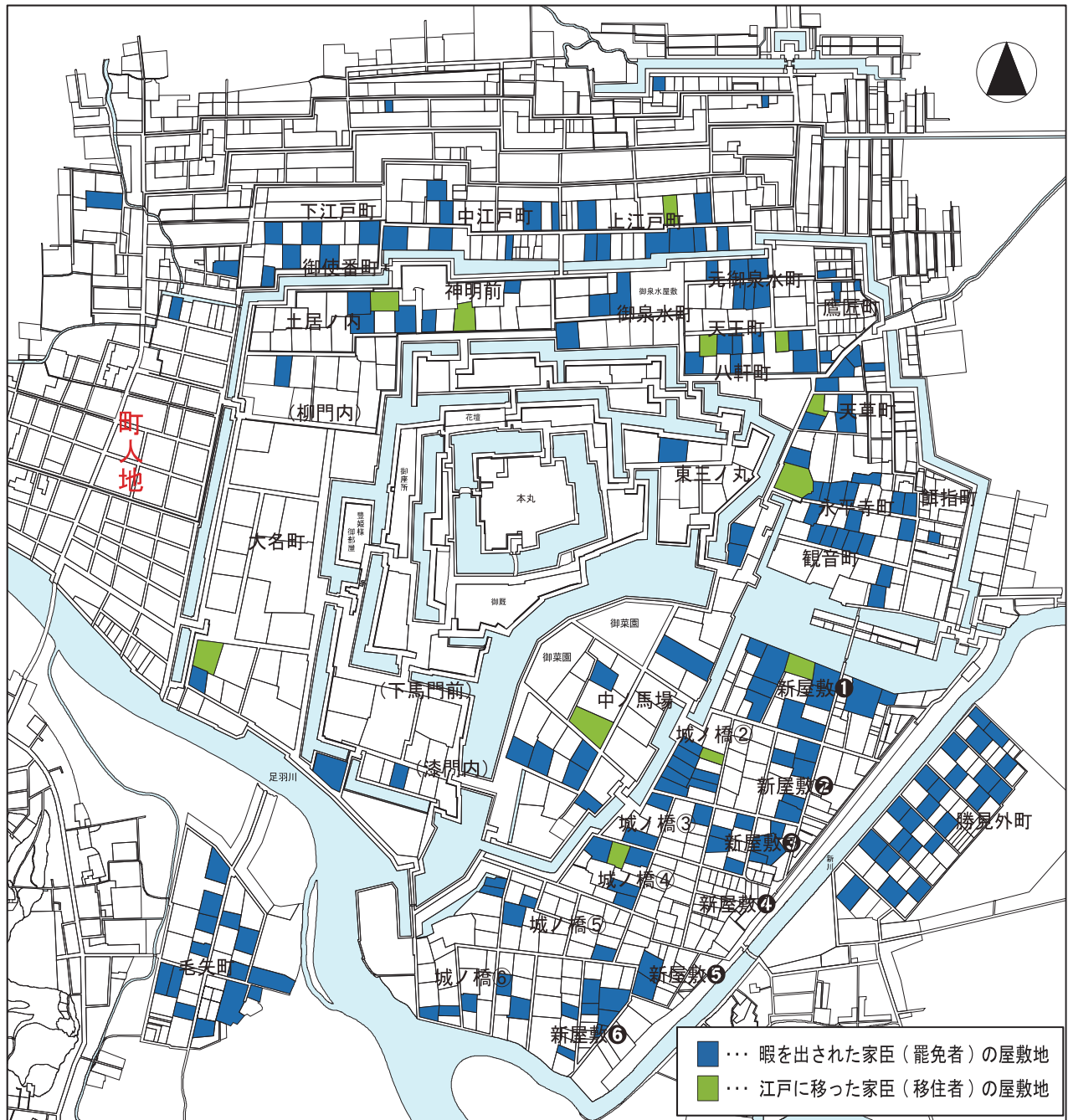


図1 貞享の大法に伴う罷免者、移住者の屋敷地

(貞享2年の『御福居城下絵図』を基に作図した)

3. 正徳期における武家屋敷地について

図2は、貞享3年の大法から28年後の正徳4年の『御城下之図』⁹⁾(以後、『正徳絵図』)にみられる明地(赤色)、地方地(橙色)、畑地(緑色)の分布を、それぞれ色分けして示したものである。また、大法前の屋敷地数と大法後の罷免者と移住者の屋敷地数および正徳4年時の明地数を町別に示したものが表3である。

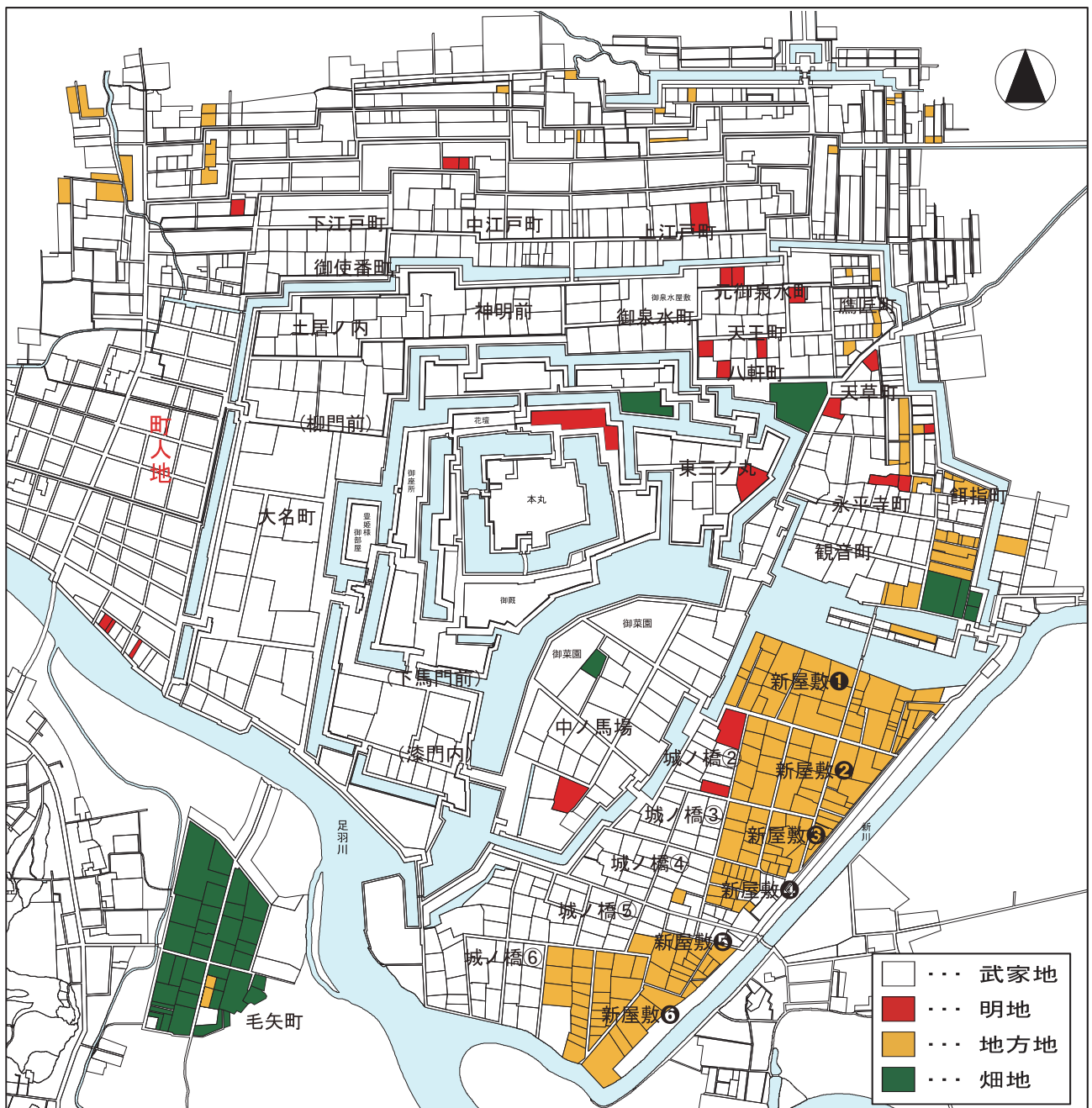


図2 明地や地方地、畑地になった屋敷地（正徳4年）
（貞享2年の『御福居城下絵図』の屋敷割の状態に、変化した正徳4年の状態を重ねた）

3.1. 屋敷地の変容

図2によると、赤色で示した明地は24筆あり、城下周辺部の北から東南にかけて点在している。町別にみると、城下中心部の北二ノ丸と東三ノ丸に1筆ずつあり、本丸の東北方の元御泉水町に3筆、天王町に2筆、八軒町に1筆、天草町に2筆、餌指町に3筆と、東南の中ノ馬場に1筆と城ノ橋②区に2筆の計17筆確認できる。それ以外の7筆は、いずれも城下の外側にみられる（表3参照）。

この中で、大法後に空屋敷地になった屋敷地と重なるのは、元御泉水町のMO-7、天草町のAm-21と餌指町のEs-3の3筆のみである。したがって、大法後にできた210筆の空屋敷地は、正徳4年までの間にほとんどが武家屋敷地に戻ったことがわかる。

表3 町別にみた貞享3年の大法後の空屋敷地および正徳4年時の明地数

年代 区画	貞享2年 (1685) 屋敷地数	大法後(1686) 空屋敷地		正徳4年 (1714) 明地
		罷免者屋敷地	移住者屋敷地	
北二ノ丸	0	0		1
東二ノ丸	0	0		
南三ノ丸	1	0		
西三ノ丸	1	0		
北三ノ丸	4	0		
東三ノ丸	9	1		1
西外郭	0	0		
大名町	19	1	1	
下馬門前	4	1		
漆門内	8	1		
木蔵町	2	0		
新築地	2	1		
柳門前	3	0		
土居ノ内	23	4	1	
神明前	11	2	1	
御泉水町	11	3		
元御泉水町	13	6		3
天王町	12	5	2	2
八軒町	8	3		1
三ノ丸鷹冷場	1	0		
鷹匠町	41	4		
上江戸町	26	8	1	1
中江戸町	28	6		
下江戸町	10	4		
御使番町	7	3		
天草町	26	7	1	2
永平寺町	18	8	1	

年代 区画	貞享2年 (1685) 屋敷地数	大法後(1686) 空屋敷地		正徳4年 (1714) 明地
		罷免者屋敷地	移住者屋敷地	
観音町	14	8		
餌刺町	30	1		3
竹ノ鼻	4	0		
中ノ馬場	32	7	1	1
元割場	5	2		
鵜匠町	11	0		
城ノ橋②	12	6	1	2
城ノ橋③	11	3		
城ノ橋④	23	4	1	
城ノ橋⑤	21	3		
城ノ橋⑥	33	6		
小計		22	2	
新屋敷①	37	9	1	地方地
新屋敷②	31	8		
新屋敷③	21	6		
新屋敷④	29	3		
新屋敷⑤	19	3		
新屋敷⑥	30	8		
小計		37	1	
毛矢町	39	14		畑地
勝見外町	59	23		廃墟
橋北地区		10		7
橋南地区		6		地方地
合計	749	198	12	24

(筆)

表3をみると、空屋敷地が最も多い新屋敷は、38筆あった空屋敷地（罷免者37筆・移住者1筆）とそれ以外の武家屋敷地を含めた①区～⑥区の全域が地方地に替わっている。このうち、大法前に新屋敷⑥区に住んでいた山本源右衛門は、城下中心部の東三ノ丸の并河長八（ES-2）の屋敷跡に替わり、②区の大宮彦右衛門もやはり中心部の土居ノ内のDo-28（加藤十右衛門）に転居している。さらに、⑥区にいた田中条左衛門は、新屋敷と同じ城下周辺部の天草町のAm-22（杉田壺岐の与力屋敷）に屋敷替えしている。これら以外の者も、城下内の武家屋敷地のいずれかに屋敷替えしていると思われる。

新屋敷と西隣する城ノ橋の空屋敷地は24筆（罷免者22筆・移住者2筆）あったが、これを図2と比較すると、これら空屋敷地はすべて武家屋敷地に戻っている。

勝見外町も空屋敷地が23筆あり新屋敷に次いで多かった。図2をみると、勝見外町の位置には武家屋敷地や通りはみられず、町全体が取り払われている⁽¹⁰⁾。大法後も福井藩に留まった家臣（以後、残留者）も、やはり城下内の武家屋敷地に転居しているとみられるが、現状では把握できない。なお、勝見外町は、その後の各時代の城下絵図においても一切描かれていない。

橋南の毛矢町は、大法直後14筆の空屋敷地と25筆の武家屋敷地がみられる。図2と比べると、空屋敷地を含む武家屋敷地が、すべて畑地と地方地に替っている。そして、大法前に毛矢町に住んでいた高田小左衛門は大名町の并河長八（Da-20）の屋敷跡に、奈良左近右衛門と大崎左太夫が中ノ馬場の浅田佐内（Na-4）と牧野九郎左衛門（Na-8）の屋敷跡に移っている。同じく毛矢町にいた忍田儀兵衛は土居ノ内の熊谷小兵衛（Do-20）の屋敷跡に、力丸又左衛門は中江戸町の林六三左衛門（NE-16）の屋敷跡に転居している。

したがって、貞享3年の大法以前に毛矢町に住んでいた高田小左衛門や奈良左近右衛門、大崎左太夫らは、大法に伴い空屋敷地になった城下中心部に転居したことがわかる。

これ以外に、大法直後に22筆の空屋敷地があった城下中心部の土居ノ内、神明前、御泉水町および御使番町、下江戸町、中江戸町など6町には明地が1筆もなく、22筆はすべて武家屋敷地に戻っている

以上のように、大法で罷免されずに新屋敷や毛矢町に住んでいた残留者を、城下中心部の大名町や土居ノ内の空屋敷地に転居させていたことが認められ、橋北の武家屋敷地に関しては、大法直後に 95 筆（罷免者 86 筆・移住者 9 筆）あった空屋敷地のほとんどが武家屋敷地に戻っていることを指摘した。

4. 再登用者について

福井藩は貞享の大法の際、68 万石から 25 万石に減封されている。『家譜』⁽¹¹⁾の貞享 3 年 6 月 11 日の条文によると、家臣の禄高は原則的に半分にすること、但し禄高の少ない 150 石取は 100 石とし、100 石取はそのまま 100 石、50 石取もそのまま 50 石とすることなどが申し渡されている⁽¹²⁾。

再登用者について、『半知減員覚帳』と『探源院（吉品）様再勤後給帳』⁽¹³⁾（以後、『吉品給帳』）を比較すると、熊谷小兵衛が禄高 500 石から 250 石で再登用されているほか、柘植伊右衛門が 500 石から 250 石、千本長右衛門が 400 石から 200 石とそれぞれ半減されている。100 石取の真杉所左衛門は 100 石のまま変わらず、再登用されていることから、前掲の条文通りである。但し、波々伯部小左衛門は『半知減員覚帳』と『吉品給帳』のいずれ給帳とも 600 石のままで変わっていない。この他にも、次稿で報告する予定である皆川多左衛門も、3 代綱昌時代の『清浄院（綱昌）様御代給帳』⁽¹⁴⁾と『吉品給帳』に記されている禄高は、両給帳とも 1000 石である。

5. おわりに

以上、貞享の大法に伴う武家屋敷地の変動について検討した結果、福井城下の武家屋敷地は、これまで貞享 3 年の大法直後に多くの武家屋敷地が空屋敷地や畑地になり、その後、享保 6 年の松岡藩併合⁽¹⁵⁾を期に再び武家屋敷地に戻ったと伝えられている。しかし、城下中心部の土居ノ内や神明前をはじめ、橋北の武家屋敷地に限っては、貞享 3 年～正徳 4 年の間に武家屋敷地に戻されていたことを明らかにできた。

貞享の大法に伴って、暇を出された家臣（罷免者）は 288 名で、そのうち 300 石以下の中級と下級武士が 191 名であったこと、6 代綱昌に随従して江戸に移った家臣（移住者）は 51 名であり、綱昌の側近が中心に選ばれたことなどが指摘できる。

また、罷免者の屋敷地は城下周辺部の新屋敷、城ノ橋、勝見外町、毛矢町に集中しており、逆に城下中心部の大名町や下馬門前には少なかったこと、貞享の大法前に毛矢町に住んでいた高田小左衛門や奈良左近右衛門らは大法に伴い空屋敷地になった城下中心部に転居していることなども明らかにできた。

注

- (1) 8 枚の城下絵図はすべて、松平文庫、松平宗紀所蔵、福井県立図書館保管。
- (2) 伊豆蔵庫喜、吉田純一、“福井城下の武家地の研究 8～30”，日本建築学会大会梗概集 建築歴史・意匠，(2010-2015)，同北陸支部研究報告集，Vol.50-57，(2007-2015)，福井工業大学研究紀要，Vol.37-45，(2007-2015)，参照。
- (3) 福井県立図書館、福井県郷土誌懇談会共編，“国事叢記 上”，(1961)，p.270，貞享 3 年 3 月 3 日条，によると，貞享 3 年(1686)に福井藩は 25 万石に半知されている。その際，1000 人余の藩士が禄を失い，福井城下の武家屋敷地の多くは空き地となっている。
- (4) “福井市史 資料編 4 近世二”，(1988)，pp.257-277，福井市。
- (5) 注 1 と同じ，松平文庫，松平宗紀所蔵，福井県立図書館保管。
- (6) 本研究においての城ノ橋と新屋敷の区分は，貞享 3 年の大法後に地方地や明地にならなかった城ノ橋地区の中央から西側にかけての武家地を城ノ橋とし，享保 6 年以降の松岡藩士の移住によって再興された東側および東南部の武家地を新屋敷とした。そのため，城ノ橋①は，新屋敷①に含めている。
- (7) 城ノ橋と新屋敷の武家屋敷地の変遷については，伊豆蔵庫喜，吉田純一“城ノ橋地区における武家屋敷地の変遷 1”，日本建築学会北陸支部研究報告集，Vol.56，(2013)，pp.446-449，“城ノ橋地区における武家屋敷地の変遷 2・3”，福井工業大学研究紀要，(2013)，Vol.43，pp.387-398，(2014)，Vol.44，pp.286-296，で詳しく報告している。

- (8) 福井県立図書館，福井県郷土誌懇談会共編，“国事叢記 上”，(1961)，pp.187-188，寛文9年4月15日条，福井県郷土誌懇談会．寛文9年（1669）の大火後には，城下東南部の城ノ橋寺町や勝見寺町を東端の外中島町に移し，その寺町跡に中ノ馬場の百間堀沿いにあった武家屋敷を移転させている．
- (9) 注1と同じ，松平文庫，松平宗紀所蔵，福井県立図書館保管．
- (10) 勝見外町は，寛文9年（1669）の大火後に新川の東側につくられた武家町で歴史は浅く，居住者も中級や下級武士が中心であったことも罷免者を多く排出した要因と思われる．さらに享保年間に町が再興されなかったのは，城下の外側に武家町を設置しなくても，城下内の武家屋敷地で賄えたものと推測できる．
- (11) 越葵文庫，松平宗紀所蔵，福井市立郷土歴史博物館保管．
- (12) “福井市史 資料編6 近世四上”，(1997)，pp.148-149，福井市，所収の“家譜”に「知行半減申渡覚 一，排知何茂半減 一，百五拾石取ハ百石 一，百石取ハ御減無之 一，五拾石取ハ右同断」とある．
- (13) 前掲4，pp.277-293．
- (14) 前掲4，pp.235-257．
- (15) 福井県立図書館，福井県郷土誌懇談会共編，“片叢記・続片叢記”，(1955)，p.658，享保6年12月11日条，福井県立図書館，によると，享保6年（1721）12月に，松岡藩主昌平が宗昌と改名して福井藩を相続し9代藩主となった結果，松岡藩士も昌平とともに福井城下へ移り住んでいる．

（平成28年3月31日受理）